

ジェンダー視点を取り入れた家庭科の授業における教材開発

— 中学校における家族領域を中心として —

附属研究会家庭科部会

附属国際中等教育学校 石 津 みどり

附属高等学校 酒 井 やよい

附属小金井中学校 佐 藤 麻 子

附属竹早中学校 阿 部 睦 子

附属世田谷中学校 桑 原 智 美

附属小金井小学校 藤 田 和 美

附属大泉小学校 小 野 恭 子

附属特別支援学校 池 尻 加奈子

目 次

1. はじめに	128
2. 開発した教材について	128
(1) 背景	128
(2) 教材とその概要	128
3. 授業実践について	129
(1) 対象生徒の実態	129
(2) 指導計画	129
(3) 第1次の授業を行って	131
(4) 考察及び課題	134
4. 次の教材開発に向けて	135
(1) 目的	135
(2) 分析の方法	135
(3) 結果・考察	136
(4) 開発が求められる教材とは	138
5. まとめ	138

ジェンダー視点を取り入れた家庭科の授業における教材開発

— 中学校における家族領域を中心として —

附属研究会家庭科部会

附属国際中等教育学校 石 津 みどり

附属高等学校 酒 井 やよい

附属小金井中学校 佐 藤 麻 子

附属竹早中学校 阿 部 睦 子

附属世田谷中学校 桑 原 智 美

附属小金井小学校 藤 田 和 美

附属大泉小学校 小 野 恭 子

附属特別支援学校 池 尻 加奈子

1. はじめに

現代社会においては、人口の構成や社会情勢から、男性も女性も性差で区別されることなく、社会を構成していくことが望まれている。しかし、過去の家長制度や地域ごとの習慣などが残っていて、無意識のうちに男女を区別して考えてしまうことが少なくない。世代によっては、その意識が顕著であり、個人の希望や個性を無視した生き方を強いられることさえあった。若い世代でも男女を区別していることを意識せず、ジェンダー的な考えで行動していることがあるのではないだろうか。

家庭科には、女子だけが履修していた教科から男女共修教科へ移行していった歴史がある。が家庭科の学習内容には、家族の領域や保育や育児など、家庭の中で女性が中心になって行われていたものも多く含まれることから、ジェンダーについて考えられる場面が数多く存在すると考える。

そこで、ジェンダー視点を取り入れた授業実践を行うべく、教材開発を行った。本研究は、中学校における家族領域を中心として行った。家族は、新しい家族誕生の場面でどのように考えるのかを検証し、どのように男女を区別しているのかについて、考察するための視聴覚教材を開発した。また開発した視聴覚教材を活用した授業の中で、生徒がジェンダー意識に気づき、男女を取り巻く問題について考察できることをねらいとした。

2. 開発した教材について

(1) 背景

中学家庭科の家族領域における視聴覚教材としては、「さくらんぼぼうや」や「NHKビデオ教材 赤ちゃんと共に育ち育てる」が定番であり、これまでの授業実践において使用してきた。特に、「NHKビデオ教材 赤ちゃんと共に育ち育てる」は、育児の男女共同参画の視点から作成されており、価値のある教材である。しかし、どちらも10年以上前に制作されたものであり、登場する家族の姿がめまぐるしく変化する現代社会と離れてきている。近年は、視聴させると、生徒から「映像が古い」という声があがるという実態もある。映像の中の世界にリアリティを感じ、いかに「自分のこととして」考えられるかが視聴覚教材に求められる。そこで、今回、現代社会に対応した新たな教材を開発することには意義があると考えた。

(2) 教材とその概要

とある30代の夫婦が、新しい家族を迎え、新しい生活を始めるにあたり、どのような気持ちでいるのか、

また出産、育児を通して、生活や家族関係はどのように変化するのか、主に男女の性差に対する考え方、性別による役割などに焦点を当てて追跡した。動画や写真は、夫婦自身やその家族が撮影したものであり、今回の研究チームである附属研究会家庭科部会メンバーが編集を行った。動画編集には、Macの動画編集ソフトiMovieを用いた。スライド編集には、マイクロソフトのプレゼンテーションソフトPowerPointを用いた。

表1に、開発した教材の概要を紹介する。

表1 開発した教材

No	種類	タイトル	内容・ねらい
1	DVD	胎動	妊娠初期（11週）から妊娠中期（27週）までの胎児の成長記録の動画。胎児や妊娠出産のメカニズムを知り、関心を持つ。
2	DVD	夫婦の会話	妊娠4か月時（性別判明前）と妊娠5か月時（性別判明後）の夫婦の会話を収録した動画。性別による子どもへの期待の違いや、夫婦の考え方の相違に気づく。
3	DVD	おばあちゃんの会話	夫婦の祖母（90歳）との会話を収録した動画。世代間による性別に対する意識の相違に気づく。
4	スライド	うまれたよ	誕生した赤ちゃんの写真と、名前、身長、体重等を紹介するスライド
5	DVD	あっくんのお誕生	出産直前から、出産時の夫婦の様子と会話を収録した動画。出産に立ち会った夫と無事出産を終えた妻の気持ちを知る。
6	DVD	あっくんとのくらし	誕生後の新しい家族のくらしの模様と3か月までの赤ちゃんの成長を追跡した動画。初めて育児に取り組む夫婦の様子を知り、関心を持つ。

3. 授業実践について

本研究において開発した教材を用いて、4地区の附属中学校において、それぞれの実態に合わせて指導計画を立て、授業実践を行った。ここでは、附属国際中等学校の中学3年生を対象とした実践例について報告する。

(1) 対象とした生徒の実態

附属国際中等学校は、中高一貫のインターナショナルスクールだが、基本的に日本語で授業を行っている。日本の小学校から進学した生徒が多い。だが、3割程度は海外からの帰国生徒や国内のインターナショナルスクールからの入学者であり、家庭科の授業を受けたことのない生徒もいる。

対象とした中学3年生は、持ち物や衣服に不自由をすることはなく、毎日の弁当も手の込んだ手作り弁当を持ってくるような、家族の保護を十分にうけている生徒集団である。親の気持ちや自分の出生にまつわるエピソードを冷静に考えることができ、次の世代を担う立場で考えさせることができる力は備えている。

(2) 指導計画

第1次	誕生前からはじまる家族との関わり	～父親・母親の気持ち～	1時間
第2次	子供の誕生と家族	～父親・母親への質問～	1時間
第3次	子供の成長と家族の関わり	～父親・母親からの回答～	1時間

以上、全3時間の計画を立てた。第3次では、視聴覚教材で取り上げた夫婦と赤ちゃんをゲストとして教室に迎え、実際に講話を聞くという計画を立てた。

以下に、第1次の授業の指導案とワークシートを紹介する。

【指導案】 家庭分野（家族と家庭生活）

学習指導案（ジェンダーを意識した授業の試み）

授業者 石津みどり

対象学級 附属国際中等教育学校 3年

男子 12名 女子17名 合計29名

場所 TGUISS 家庭科室

1. 題材名「子どもの出産をめぐるジェンダー意識の相違に気づく授業」

2. 題材の目標

- ①子どもの出産をめぐってどのようなことに期待するかなど、父と母による意識の違いに気づく。
- ②子どもの出生をめぐる誕生への期待に、男児と女児ではどのように違うのか気づく。

3. 題材設定の理由

生徒は 保護者のもと、幼い頃より日常の食事や基本的な生活に不自由することがない。家族の支援を当然のものとして、意識することなく成長してきた。授業で、家庭生活と地域とのかかわりや家族の機能と家族の変遷を学び、自分の成長と家族関係について考えてきた。父親と母親では、子どもへの期待はどのように違い、子どもの性別による親の期待はどのように違うのだろうか。また、ジェンダーの視点でそれらをとらえることはできるのだろうか。

そこで、子どもの誕生を喜び、出産に向けて期待を寄せる家族の姿を見ることで、自分を取り巻く家族の支えに気づき、家族の喜びや期待などの思いを知り、家族について考えることにした。子どもに対する家族の期待は男児女児ではどのように違うのだろうか。日常の会話の中に、性差による区別はないだろうか。

実際の家族の会話から、家族について考え、ジェンダーの意識の相違に気づくことをねらい、この題材を設定した。

4. 題材の指導計画

- 第1次 誕生前からはじまる家族との関わり ～父親・母親の気持ち～ 1時間（本時）
- 第2次 子供の誕生と家族 ～父親・母親への質問～ 1時間
- 第3次 子供の成長と家族の関わり ～父親・母親からの回答～ 1時間

5. 本時の目標

- 1. 子供の出産をめぐる期待が、父と母によって違うことに気づく。
- 2. 男児と女児では親の期待はどのように違うのか気づく。
- 3. 自分を取り巻く家族について考えることができる。

6. 展開

授業過程	指導内容	生徒の学習活動・予想される生徒の反応	教師の指導上の留意点
導入 10分 DVD 5分	・前回の授業で予告した「胎動」のDVDをみる。 ・本時の学習内容を確認する。	・「胎動」のDVDを見て、胎児の成長の様子を見る。 ・本時の学習内容を確認し、ワークシートを配る。	・「胎動」のDVD 5分 ・モニター位置確認 ・ワークシート配布

展開 30分	・生まれてくる子をめぐり、夫婦でどのような会話をするか考える。	・「胎動」のDVDをみながら、夫婦はどんな会話をするか想像し、ワークシート①を書く。	・「夫婦の会話」のDVD04:00～07:00
DVD 3分	・「夫婦の会話」のDVD（3分）をみて、生まれてくる子の性別による思いの違いを確認する。「男なら…」の場面に注目させ、子どもに対して期待する親の気持ちを考える。	・「夫婦の会話」のDVDをみて、会話の内容や様子をワークシート②に書き取る。	・男の子だったらどう思うか、女の子だったらどう思うか、夫婦の会話を確認させる。
DVD 1分	・「おばあちゃんとの会話」のDVD（1分程度）を見る。おばあちゃんと親の会話の違いやDVDをみて感じたことは、何故なのかを考える。 ・自分が親だったらどのようなことを考えるだろうか。	・「おばあちゃんとの会話」DVDをみる。胎児の性別がわかり、おばあちゃんが喜ぶ様子を見て、感じたことをワークシート③に書く。 ・①②③から、どんなことがわかったかを班毎に話し合い、グループで出た意見をまとめて代表者が発表する。 ・いろいろな人の意見を聞いて、感じたり、思ったりしたことを書く。自分たちの班で出た意見と類似しているところを確認する。また、おばあちゃんの孫に対する期待と親の期待で違う点を、班で話し合う。 ・ワークシートを書く。 ・発表する。	・「おばあちゃんの会話」のDVD12:00～13:00 ・子どもに対する期待が性差で異なることに着目する。 ・発表グループと順番を示し、教材拡大機を使った発表方法を説明する。（教材拡大機でワークシートを拡大して発表する。） ・各グループを回り、記入と発表準備を促す。 ・班の代表者が発表。
まとめ 10分	・ワークシートを回収する。	・他者の意見を聞いた感想などをワークシートに記入してまとめをする。	・感じたり思ったりしたことをワークシートに書いて、提出する。

7. 本時の評価

1. 子供の出産をめぐる期待が、父親と母親によって違うことに気付いたか。
2. 男児と女児では親の期待はどのように違うのか気付いたか。
3. 自分を取り巻く家族について考えることができたか。

(3) 第1次の授業を行って

第1次の授業における③クラス84名分の生徒のワークシートの記述内容について検討した。またビデオにより授業記録も取り、補助的に分析に活用した。

1) 胎児のDVDを見て胎児の両親はどのような会話をすると思うか

図2に生徒の記述内容を分類したものを示した。性別に関するものが半数近くあげられた。同数、性別によらず胎児の成長についてあげられた。

思ったこと、気づいたことを書こう。

1

①胎児のDVDをみて、どう感じるか。夫婦でどんな話をすると思うか。想像して書いてみよう。

2

②夫婦の会話DVDをみて、「男だったら～」「女だったら～」と、どんな会話をしているか。

③おばあちゃんのDVDをみて、胎児の性別が分かり、おばあちゃんが喜ぶのをみてどう思うか。

3

①②③から、どんなことがわかったか。 各班で話し合い、まとめて発表する。

いろいろな人の意見を聞いて、あなたが感じたり、思ったりしたことを書きましょう。

4

図1 ワークシート（第1次）

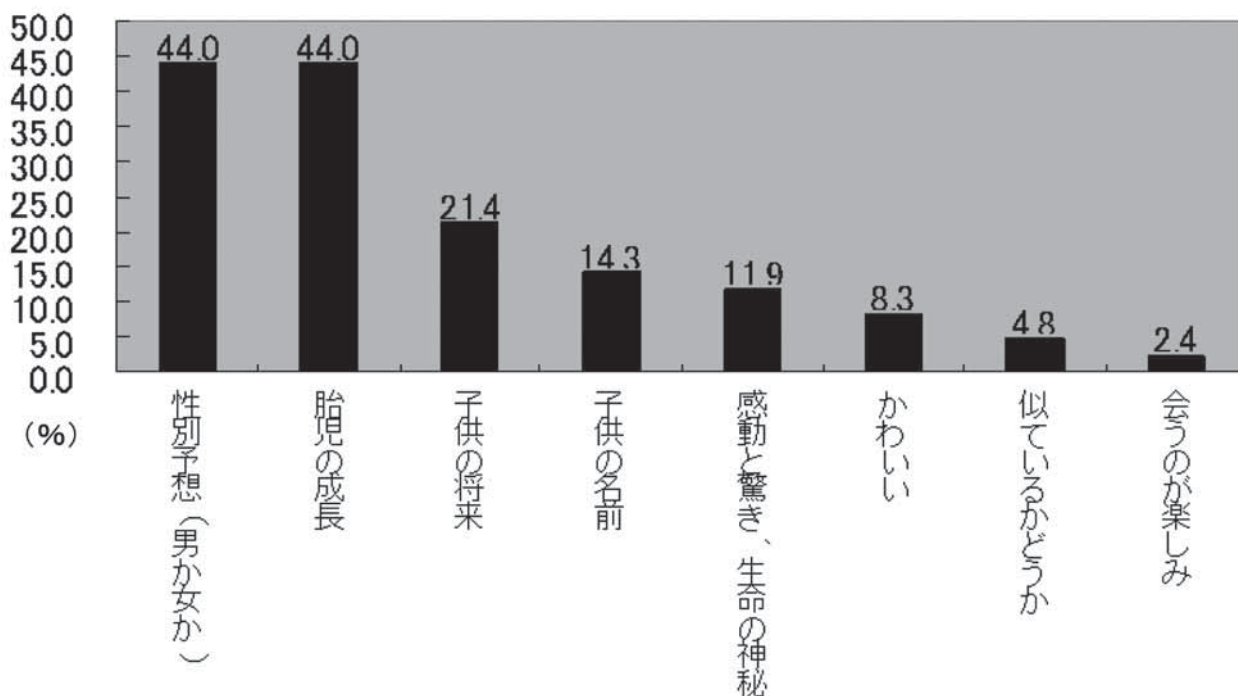


図2 ワークシートの問1に対する回答

2) DVDを見てわかったことを班で話し合い、発表する

話し合った結果の発表場面では、ジェンダーに関する発言は9.5%であった。以下には、ワークシートの問3に対する回答をまとめた。図3には生徒の記述例を示した。

表2 ワークシートの問3に対する回答

- ・性別がどちらであっても、健康であることが大切である。
- ・子供が生まれることは、両親だけでなく、親戚や周囲の人達にもうれしいことである。
- ・生まれてくる子供の未来を想像することは、両親にとって楽しいようである。
- ・両親は、胎児が無事に生まれるのが心配な様子だった。
- ・赤ちゃんの誕生は周りを明るくする。みんなを幸せにする。
- ・赤ちゃんの誕生は、夫婦の絆が強くなり、家族としてのまとまりができてくる感じがする。
- ・DVDの夫婦は、温かい家庭である。
- ・赤ちゃんの誕生で、自分たちや家族が子供のときのことを思い出していた。
- ・昔（おばあさん）の世代の人は、男の子の誕生を願っていたことがわかった。
- ・今（両親）の世代は、性別を気にすることなく誕生を喜んでいる。（世代による価値観の違いがわかった。）

①②③から、どんなことがわかったか。各班で話し合い、まとめて発表する。

- 皆、喜ぶ（子供が生まれた嬉しい、孫が生まれた嬉しい）
- 夢を持つ（生まれたら…）
- 両親は、男でも女でもOK。
- 昔の人（おばあさん）は、男か女かを気にしている（→昔の跡つぎなどの関係かな？）
- どんな風に育てたい・自分がめざしていた夢を子供にやらせている
- 子どもができただけでうれしい（胎児を見て嬉しかった人はいたかな？）
- 夢がある（一緒に過ごしたい）

図3 ワークシート問3 生徒の記述例

表2からは「性別がどちらであっても……」や「昔の世代の人は男の子の誕生を願っていたことがわかった」という記述があることがわかる。この記述から、昔の人にはジェンダーバイアスが残っているが、現在は薄くなっていることに気付いていることがわかる。

3) 班で話し合ったり、発表を聞いたりして思ったこと

授業の最後に、個人記述をさせた。表3にその記述内容を示した。DVD教材を視聴して考えたこと、話し合っただけで発見したことや理解したことが記入されていた。図4には、生徒の記述例を示した。

表3 ワークシートの問4に対する回答

- ・親は、男女を気にせず、胎児の健康を第一に考えると思った。その反面、健康でなかった場合には、大変悲しい事だと想像できる。
- ・父親は、協力することによって、親としての実感を持っていくと思った。
- ・赤ちゃんお誕生は、幸せいっぱい、周りを笑顔にする。
- ・子供を持つということは、責任（不安）と喜び、どちらが大きいのだろうか。
- ・男女の育て方が違うのは、4歳くらいから増えると思う。育て方が違うから男女の性別の違いが気になるのではないと思う。

考えられる。

一方、個人の記述になると、一人ひとりの正直な感想を表現し、個人的な問題についても記述する生徒もいた。また、「日本は、男女の区別をされない（このビデオでは）ので、良いと思った。」という記述があったように、普段から日本以外の国について意識する機会が多いからこそ気付く回答もあった。

開発したDVDには、意図的にジェンダーについて考える視点を盛り込んでいた。しかし生徒の発言に「おとうさんもいろいろしなくちゃいけないんだね」「こういう家族っていいなあ」という発言があったことからジェンダーをきっかけに、家族領域における生徒の考えを広く引き出すことができたと評価できる。

4. 次の教材開発にむけて

本研究において行った授業では、開発したDVD教材を用いるとともに、取り上げた夫婦と赤ちゃんをゲストとして招待し、質疑応答するという実践を行った。生徒は、DVDで見ていた家族を自分の家族のように感じ、自分の将来や自分の家族について置き換えて考えることができた。実際に出会い、対話することは、非常に効果的であり、生徒の意欲や関心を大いにひきだすことができた。

しかし、夫婦が赤ちゃんを連れて来校し、インタビューに答える授業を今後も継続的に行うことは現実的でない。対話に代わる視聴覚教材を開発するために、生徒の記述内容から検討することとした。

(1) 目的

第2次の授業では、子どもの誕生と家族について考え、DVDに登場した父親・母親に対する質問を記述させた。そこで生徒からあげられた父親、母親への質問について分析を行った。開発した教材を用いると、生徒はどのようなことに興味関心を持つのか明らかにすることで、生徒が知りたいと思うことに即した教材を開発することができる考えた。

(2) 分析方法

生徒が授業で使ったワークシートへの記述を①父親、②母親に分けた。さらに質問内容の似ているものをカテゴリーわけしたところ、①妊娠中、②出産、③自身、④家族、⑤育児、⑥子の6つに分類することができた。各カテゴリーの中で、さらに内容ごとに項目立てして分類し、集計した。質問例とともに表4に示す。回答は、84名分である。

表4 カテゴリー別質問項目とその質問例

カテゴリ	項目	質問例
①妊娠中	感情	子どもができたとき、どんな気持ちになったか
	信条	妊娠中気をつけたことは
	性別	男の子と女の子、どっちがよかったですか
	生活	いつごろから子どものものや服を買い揃えましたか
②出産	感情	子どもが生まれたとき、どんな気持ちでしたか
	生活	出産中に何かしたことはあるか
	感情	ある日から家族が一人増えるってどんな感じですか
	親の自覚	自分の子どもをもつ、親になるってどんな感じですか
	生活	お母さんになってからとなる前では、具体的にどんなことが変わりましたか

③自身	経済	赤ちゃんがいると経済的に大変ではないですか
	職業	育児休暇をとる予定はありますか
	信条	痛みをとまなまってまで出産する意味はありますか
	人間関係	子どもができて何か変わったこと（人との関係）はありますか
	パートナーへ	奥さんにどのような接し方をしましたか
	そのほか	円満な家族関係を保つためのポイントを教えてください 等
④家族	きょうだい	弟か妹の予定はありますか。どちらがほしいですか
	役割	家の中での役割はどうなっていますか
⑤育児	感情	育児で大変なことは
	信条	父親にとって、子育てとはどんなものですか
	生活	1日に育児にどれだけの時間を使っていますか
	役割	どんなことを手伝っていますか
	育児参加への理由	男性が子育てをすることに対して、どんな考えをお持ちですか
	ジェンダー	どのような服（色とか）を着せたいですか、どのような服を着せていますか？（女の子だった場合と違う？）
そのほか	トイレトレーニングはどうやって行うつもりですか	
⑥子	名付け	名前の由来はなんですか、どのように決めたのですか
	育ちへの期待	どういう子に育ててほしいか
	願い	子どもに願うことは
	教育	教育面で最も工夫、力を入れていきたいものとかあるのか、またその理由はあるのか
	習い事	どんなスポーツや趣味をさせたいですか
	職業	将来どんな職についてほしいか
	感情	これから一番楽しみなことは何ですか
	一緒にしたいこと	子どもと一緒に何がしたいですか
	ジェンダー	男の子で一番よかったこと、楽しみなことはなんですか
	そのほか	誰になついていますか 等

(3) 結果・考察

それぞれにおける質問数を集計して、グラフで割合を表示した。数字は質問数を示す。図5は、質問総数を示したものである。質問数は、若干母親への質問のほうが多かったが、両者ほぼ変わらないと指摘できる。

図6、7は、宛先のそれぞれにおいて、内容をカテゴリー別に分類した時の割合を示したものである。妊娠中のことや出産については、母親にしか聞けないことがあるので、母親に対する質問数が多くなった。子についての質問は母親より、父親のほうが多かった。この点については、質問内容との関連で考察する。

図8には、分類したカテゴリーの中でさらに内容ごとに項目に分け、父母それぞれへの質問数を比較するグラフを示した。数値は、割合(%)である。質問数を父母それぞれの質問総数で除すことで算出した。

生徒は、母親と父親それぞれに対して、違う興味を抱いて質問をしていた。最も多かったのが、母への出産時の感情を尋ねるものであった。これは、教材DVDで実際の出産シーンを見たことによる影響があると考えられる。次いで多かったものは、感情を問うものであった。妊娠中、自身、育児の3つカテゴリーにおいて特に多く挙げられていた。また、子の育ちへの期待についての質問も多かった。中学生自身がどのように自分の親に期待されているのか、興味を持っていることがうかがえる。

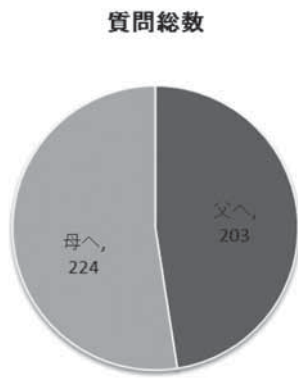


図5 宛先別質問数

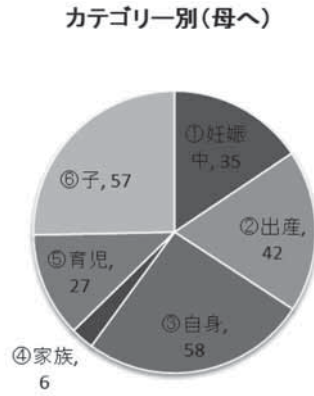


図6 母への質問

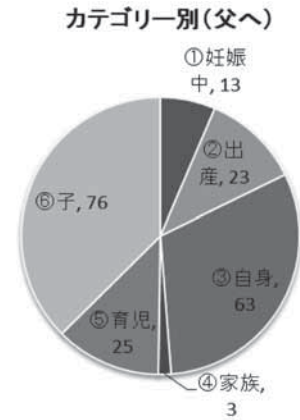


図7 父への質問

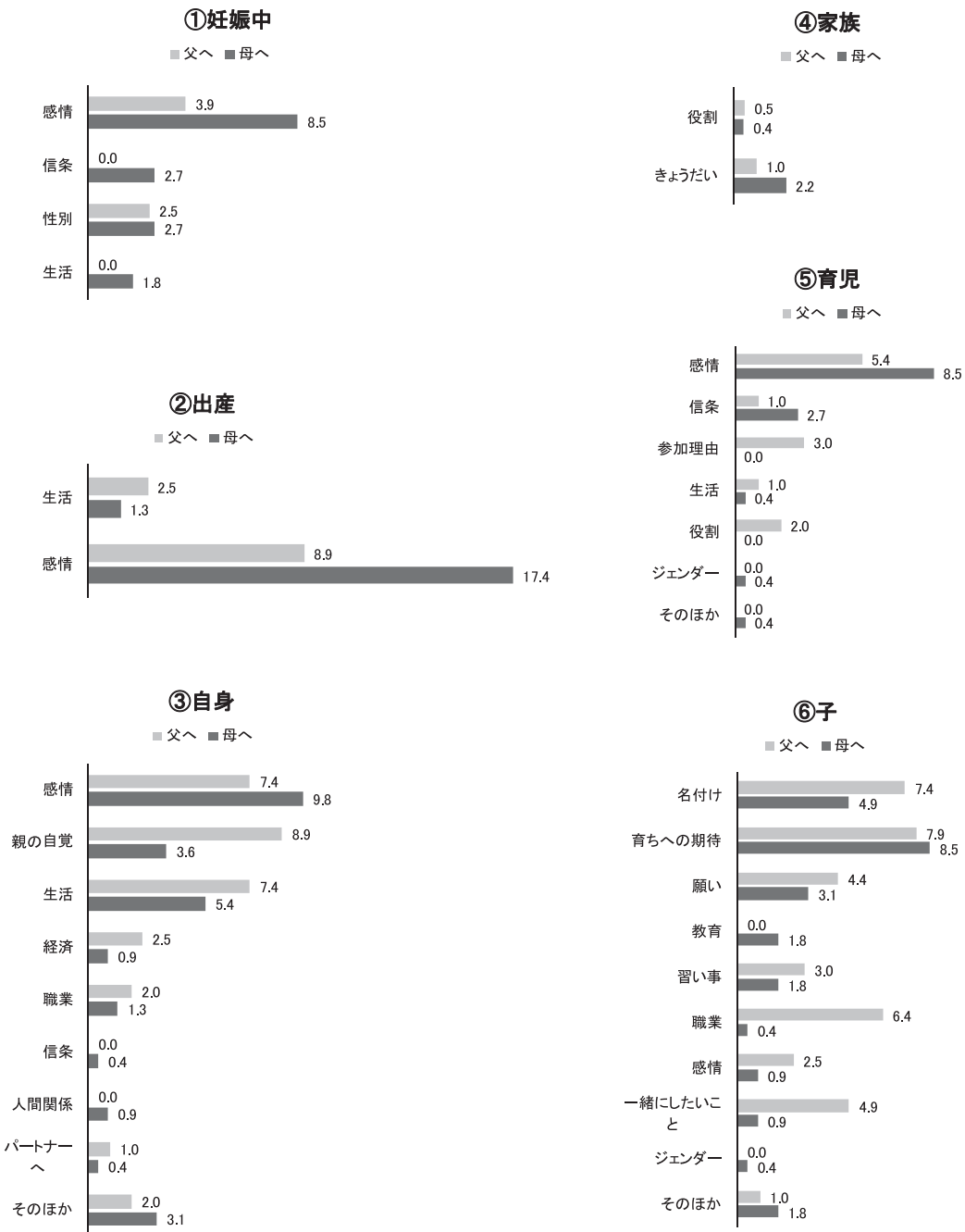


図8 カテゴリにおける各質問項目の割合

自身についての質問において、父親へ親の自覚を尋ねるものが多かった。この点については、DVD教材で妊娠中の夫婦の会話を聞いたことから、父親の気持ちの変化に関心を寄せたことによるものと考えられる。会話の内容や態度、表情から、母親は自分の胎内で子どもが成長していくのを実感し、それとともに親の自覚が芽生えていることを読み取ったからであると考えられる。

子についての質問では著しく名付け、職業、一緒にしたいことの項目が、母親より父親のほうが多かった。これは、名付けは父親に決定権がある、父親のほうが将来の職業へ期待を強く持っていると考えているからであると推測される。ここにジェンダーバイアスが表れていることが指摘できる。

また、記述には「おばあちゃんの時代に生まれてたら窮屈だったなあ」「そういえば、お母さんがいろんなことで選べなかったって言った。」など、ねらいであったジェンダー意識に気づきのあった生徒もいた。

この分析を通して、生徒の興味関心がどこにあるのか、明らかになった。

(4) 開発が求められる教材とは

対話に代わる視聴覚教材として、夫婦へのインタビューを収録したDVDの開発が求められる。本研究によって明らかとなった生徒の質問の傾向をふまえ、以下のような質問内容を検討した。

表5 インタビュー DVDにおける質問内容の提案

対象	カテゴリー	質問内容（質問文言）
母	妊娠中	子どもを授かったときの気持ちや妊娠中のことをお母さんに伺います。生まれる前に大変だったことや、子どものために気をつけたことはありましたか？
父	出産	お父さんは、出産に立ち会われましたが、どんなことを感じましたか？
母	出産	出産とは、どんなものでしたか？
父	子	名前の由来や込める気持ちを教えてください。
父母	自身	家族が増えて、これまでと生活が変わったと思いますが、どうですか？
父母	育児	今までの育児を振り返って、大変だったことや、これはうれしかったというようなエピソードを聞かせてください。
父母	子	これから、どのように育てていってほしいと願っていますか？

5. まとめ

授業実践より、視聴覚教材の中の世界と、実際の自分の生活とがつながりあい、身近に感じられることが重要であると考えた。時代背景を考慮し、生徒の実態に合わせた教材開発を行うことで、生徒の学びが確実になることを再確認できた。

今回は、附属国際中等学校での実践を例に挙げ、検討を行ったが、他の附属中学校での実践においては、生徒の質問の傾向が異なるものであった。生徒の実態の違いもその要因であるが、同じ教材を用いても、授業者の使い方によって生徒の関心が異なってくるのではないかと考えられる。

本研究では、次に開発が求められる教材について提案したが、他の附属学校での実践事例についても合わせて検討し、多目的に活用できる教材を開発していくことが課題である。

今後も、開発した教材を活用し、附属研究会家庭科部会での連携を通して、改良を繰り返しながらよりよい授業実践を行っていきたい。

本研究は、東京学芸大学男女共同参画推進本部平成21年度OPGE助成事業による研究助成を受けて取り組んだものである。共同研究者として、前附属小金井小学校室木有紀子教諭が参加した。

また、東京学芸大学生生活科学講座大竹美登利教授には多大なるご指導を頂いた。ここで謝意を示す。ありがとうございました。